

---

# りんの花

さくら栞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

りんの花

### 【Nコード】

N4355A

### 【作者名】

さくら栞

### 【あらすじ】

毎年誕生日の朝、小屋の外に置かれている花・竜胆。七年半ぶりの再会に、揺れるりんの心。原作後の設定の話です。

きつ届いた文と空白の席。

いつの日からだろう？

私はある一匹・・・の人間の娘を連れて行動するようになった。

理由は分からない。ただ・・・生前私に向けた笑顔が脳裏をかすめた。そして気が付いた時には、父の形見の剣、“天生牙”を抜いていた・・・

よく喋る人間だった。生前は口をきけなかったが、一度死んで生き返った為何の障害もなく喋る事が出来たようだった。

それにしても不思議でならなかったのは、あの小さな体で、口でよくあれほど動き回り、喋っていたのだろうか・・・？

それだけ食料と休憩・・・睡眠が必要だったようだが。

その為、いつしかその人間に合わせて行動するようになった。よくヨチヨチと私の後を付いてきた。

私から見れば邪見も“ヨチヨチ”と歩いていたわけだが、あの短くて細い足、たどたどしい足元・・・その歩みは邪見よりもゆっくりとしていた。

いつしか阿吽を指定席とするようになった。今まで人間と触れ合った事のない阿吽だったが、元々のおとなしい性格の為か、その他に何かあったのか、驚くほどその人間に懐いた様だった。

「殺生丸様・・・」

ふと耳に入ったその声を無視する様に先へ進もうとする主。声の方を見なくとも誰かは分かる。もう何年、  
いや、何十年以上も聞いている忠実な僕・邪見の物だった。

別にいつもの事。そう思った邪見は言葉を続けた。

「早く戻つて来い。つとのことですが・・・」

「いつもの事だ」

構わず歩き出した殺生丸を、ヨチヨチと付いて行きながら言う邪見にボソリと言った。

「いい年をして何時まで家出ごとの様な事をするのか、つとも・・・」

「昔からだ。この年老いた僕は主に忠実だが一言多い。」

鈍い音がしたかと思うと、邪見は地面にへばりつく様に倒れていた。そしてその背中にはくつきりと足跡がのこっていた。どうやら突然止まった主に気が付かず、抜かした所を踏み潰されたようだ。

倒れた邪見の手に握られている文をむしり取ると、目を通した。どうやら少しは成長があったのか、主の怒りを買いそうな所は伝えなかったようだ。先ほどの言葉はまだまだ可愛い物だった。

なるほど・・・あの方らしい。

軽く溜め息をつくると殺生丸はそれを、やっと立ち上がった邪見に突き出すように渡した。

やれやれ・・・この方から文が来る度に同じ目にあつて

気が・・・

文をしまいながら邪見は大きく溜め息をつき、不機嫌そうな主を見上げた。ことの始まりは十分程前、いつものあの方の使いがこの文を届けに來た事からだった。

「若様・・・」

いつもの、長い黒髪をきつちりと束ねた男がいつもの様に殺生丸に一礼した。そしてこれまたいつもの様に邪見の方に軽く会釈してから懷から文を出し、殺生丸へと渡した。

主はこの男と面識があるようだったが、邪見はこの男が文を届けに來る前は面識がない。しかし見るからに真面目そうな、そして忠実そうな男だ。

そしてあの主と同じ金色の目から見て、恐らく同じ妖犬なのだろう。  
「御館様・・・貴方様の叔母上は口ではあきつく言っておられますが、本当は貴方様の事が心配でしょうがないのです。そして早く屋敷に戻ってきて、そして貴方様の父上の後を継いでももらいたいのです」

「それならもう何度も聞いた」

いつもの様にぶつきら棒に言う殺生丸の言葉に、使いの者・・・  
名前は分からないが、その男は少し悲しそうな顔を向けた。

殺生丸と前々から面識があるのなら、きつと言っても聞かない性格も知っているのだろう。それ以上何も言わずに、ただ一礼して去っていった。

まだ機嫌が悪い主の後を邪見は、阿吽を引きながら足早に追った。

いつもそうだ。あの方からの文が来ると、不機嫌になられ足が速くなる・・・

阿吽に乗ればいいものの、邪見はそうはしなかった。けして殺生丸の目が気になるわけではなく、ただそこが彼の場所ではないからだ。

今はそこに居ないが、そこはある人間の少女の居場所であった。そこに座ると言う事は、その少女の場所をなくす様な気がしてならなかった。

それは彼にとっても主にとっても悲しい事だ・・・

「ふう・・・」

そんな風に考える自分に気が付き、邪見は寂しそうに溜め息をついた。最初から、いつかこういう日が訪れると分かってたはずだ・・・  
。ただそれが少し早く来ただけの事。

あれから・・・

・  
りんが居なくなっ  
てからもう七年半の月日が経とうというのに・・・

きつ届いた文と空白の席。 (後書き)

初ケータイに載せますv

まだここの使い方が分からなくて悪戦苦闘しましたよ；

さてさて、この「りんの花」。結構行き当たりばつたりのような感じでしたね；というか半分はそう；

実を言うと、この後の設定の話が書きたいが為に書いたんですよ（笑）そしてその話の中にこの「半年」の意味があるんですv

式闇を知らぬ花・竜胆。しかし闇を知ってこそ……。

少し肌寒くなった秋の日の午後、夕方近く、殺生丸の叔母からの文が届いてから、数日が経ったある日のことだった。

一行はある山へと足を運んだ。

一年にたったの一度しか行かぬ山、毎年欠かさず一度行く山へ……森を抜けてお目当ての場所に着くと、邪見は軽く辺りを見回した。毎年同じことをやっている。

広い草むらだった。

夏の青々しさはないが、まだ微かに緑帯びている草に混じって色々な花が咲いている。

ススキはぎくすなでしこ

おみなえし

ふじばかま

薄に萩、葛、撫子、女郎花、藤袴や桔梗など、秋の七草と呼ばれているものを初め、色々な秋の花が咲き始めていた。

殺生丸は草むらの前で足を止め、邪見だけが草むらへと進んでいた。

阿吽は主の居る所、草むらの入り口に置いておいた。繋げておく必要などない。

二つの頭を持つ妖怪・阿吽は、邪見が行くと草むらの片隅に座り込んだ。

夕暮れ時だが、よく陽が当たる草むらで、晴れている為か余計日向ぼっこには最適だった。

その上、いくつもの甘い花の香りが鼻をくすぐる。阿吽の顔は二つとも気持ち良さそうな顔をさせた。

しかし、ちょっぴり心配そうに草むらを歩き回る邪見に目をやった。

そしてそれは、殺生丸も同じ様だった。

草むらを眺めているように見えるが、たまに邪見を目で追っていた。  
一体毎年何の為にココへやってくるのか？  
その答えはすぐに分かった。

「殺生丸様、ありましたぞ！」

そう大声で主のほうに言いやると、自分は目の前の自分の背丈とあまり変わらない花を見つめた。

無言のまま邪見の声がした方に目をやった殺生丸だが、すぐに視線を外し、再び周りを眺め始めた。

いつもの様に返事をしない主に、この年老いた僕はすぐにまた草むらを歩き始めた。

邪見と同じくらいの背丈・・・30センチから40センチ程だろうか？

真っ直ぐに伸びたか細い茎に、淡いピンク色の花を鈴なりさせていた。その周りには、青や紫の物がほとんどだった。

花の名は竜胆<sup>りんとつ</sup>。

日光を受けるとその花卉は開き、暗くなる夜には閉じる。雨や曇りの日は閉じたまま・・・

まさに陽しか知らぬ、闇を知らぬ花だ。しかし中には一生陽を知らない種も居るようだ。

だが、陽しか見えなくとも同じ事。闇を知らねば、陽の意味も分からない。

一見輝かしいように見えるが、なんとも切なく、悲しい花だ・・・。

野山に力強く咲く姿はなんとも健気で、その細い茎を支えてあげたくなるくらいだ。

そんな姿は・・・

そう・・・

まるであの少女のようだ・・・

花を開かぬ、闇しか知らぬ種が花卉を開いた・・・そんな感じだろうか・・・？

一体どれくらい経ったのだろうか？

草むらを懸命に歩き続ける邪見をよそに、傾き始めた太陽はとうとう沈んで行くこうとしていた。

「殺生丸様！これは見事な一輪ですぞ！」

再び邪見のかすれた声が主の耳に届いた。

「さっさと済ませろ」

何度目かの叫び声によりやく反応した主の声に、邪見はその茎の根元を掴み、慎重に折った。

パキンと綺麗な音がした。

大事そうにそのいピンクの蕾になるか細い茎を抱えると、主の下に走り寄った。

「今年のは今までで一番見事に見えますぞ。殺生丸様」

自分の収穫に少々興奮気味に、邪見はその収穫を主へと差し出した。

「・・・今年で七度目ですな」

ふと、何処か遠くを見つめるような目で邪見が口を開いた。

その間にも殺生丸は口を開かなかったが、自分もたった今まで太陽が在った方向を見つめた。

「りんのヤツ、この花が好きでしたな」

独り言の様にそう呟くと「あ、あの・・・殺生丸様・・・」

なにか言いにくそうに再び口を開いた。

「今年は……そのお……ワシが……りんの下に届けても……いいでしょうか……？」

しぶしぶと上目使いで主を見上げたが、殺生丸は無言のままだった。

「その……何と言うか……殺生丸様が行かずともワシがその役を……その……なんて言うか……」

最後の方は口の中ではそぼそと言う形になっていた。

そんな邪見を殺生丸は無言で見下ろしていたが、「いやっ気にしないで下され」慌てて邪見がそう言う

「お前が行け」

やっと口を開き、一言言い放った。

「はっ！かしこまりました！」

口には出さなかったが、ただ単に主の為にその役に名乗り上げたわけではなかった。

口に出して言うのが恥ずかしかったが、ただ……

ただ……姿は見えなくとも、少しでも近くへと行きたいと。あの娘の下へ……

だがそれは殺生丸とて同じ事だろう。そう思った邪見は慌てて言い直したのだ。

空には見事な三日月が浮かんでいた……

式ゝ闇を知らぬ花・竜胆。しかし闇を知ってこそ・・・。（後書き）

三日月って好きです。というか月って好きです。

少しずつ満ちてゆく満月もいいですが、やっぱりどちらかと言つと色々な形のある三日月のほうが好きですね。

では次回、懐かしいあの原作のキャラ達が登場しますv

参る口に出来ない思い。

少年・・・いや、もう青年と呼ぶに相応しいだろう。

歳ははたち前、18、19といた所だろうか？彼は先ほどから何処かを見つめていた。

その視線の先には赤ん坊とその母親らしき女性、そしてその赤ん坊をあやす一人の少女の姿があった。

ずっとそちらの方を見ていたのだろう。母親らしき女性は青年の視線気が付いたようだ。その様子に少女も赤ん坊をあやす手を止め、青年の方に目を向けた。

「あ、琥珀！ちよつと来て来て！」

まだ少し幼さが残る、可愛らしい声で青年に声をかけた。

その声に青年・・・琥珀は微かだが顔を赤くしが、すぐに「どうした？」と何事もなかった様に、少女に問いながら歩み寄った。

「今ね、瑠璃が『りん』っていったんだよ！」

「ホントか？ただ『ん〜ん』って言ったのが『り〜ん』って聞こえたんじゃないのか？」

少々興奮気味に言う少女は青年のその言葉に、プク〜と顔を膨らませた。

「そんな事ないもん！ね？珊瑚さん？」

少女・・・りんに振られたのは母親らしき女性・・・珊瑚はちよつぱり困った顔をさせたが、直ぐに「ちゃんと『りん』って言うってんじゃない？」

そう言ってから面白そうに弟とこの少女を見た。

「ね？ほら、瑠璃、りんはだ〜れだ？」

そう言って赤ん坊の方に言ったが、調度うとうとさせている目を閉じた所だった。

「あゝあ・・・もうお寝んねの時間だったのかな？」

瑠璃の白くて柔らかい頬つぺたを優しく突きながら微笑むりんの姿を見て、琥珀は「くすっ」と笑った。

「ん？何？今りんの事見て笑ったのお？」

「別に。そういう訳じゃないけど」

思わず笑ってしまった、いや、正確には微笑んでしまった自分に気が付いて、琥珀は慌てて口を開いた。

「けど何？」

「別に・・・なんでもないって」

しつこく聞いてくるりんに焦りながら誤魔化した。

「ふゝん・・・」

まだ諦めてないようなりんは、また顔を膨らませて琥珀の方を見た。

「ほら、そんな大声で話してたら起きちゃうでしょ？」

りんがまた何か言いそうな勢いだったので、珊瑚が止めに入った。  
「だって琥珀が」

まだ顔を膨らませたりんが、すぐるように珊瑚に言った。きっと自分の事を面白がって笑ったと思っているのだろう。

ホント、この子は鈍いね・・・

そしてクスツと笑った。

「あゝ珊瑚さんまでー！！」

そう声を上げてから、起き出しそんな瑠璃姿に思わず両手で口をふさいだ。

「そんな理由で笑ったんじゃないよ」

その言葉に、りんはわけの分からぬ顔をしたが、珊瑚はただニッコリと微笑んで見せた。そして、少し離れた所で夕日を見上げる弟

の姿を、りんに悟られぬ様に盗み見た。

まさか言えるはずがないだろう。

なんて愛らしいんだろうと思ったなんて・・・

参る口に出来ない思い。 (後書き)

ちよつと豆知識：珊瑚の一番下の子供（上にも何人も居ますよ）の名前の“瑠璃”はですね、七宝という七種の宝物の一つなんです。ちなみに金、銀それから“珊瑚”や“瑪瑙”なんかもそうです。

さて、八年後（正確には七年半）と言う事で琥珀も十九歳！（兄上の人間換算年齢と同じやん！）りんちゃんは、あの頃六、七歳と考え、（五、六歳と書いている方もいらっしますが、私的には小一なんです）犬夜叉に出逢った時のかごめと同じ歳、十四、五歳つと言う事です。でも精神年齢低いと思います。それにしてもうち琥珀で遊ぶの好きですv（マテヤ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4355a/>

---

りんの花

2010年10月9日12時14分発行